

猪苗代兼載

——猪苗代が生んだ文化人——

猪苗代兼載は今から五五七年前の享徳元年（一四五二）に、町内の小平潟で生まれました。六歳の時に故郷を離れ、連歌師として修業を積み、連歌師の最高の位である京都の北野連歌会所奉行の職に就いた当代きつての文化人です。今年（2009）は兼載の没後五百年という節目の年。今月号では郷土の偉人の生涯をたどります。



（会津若松市・自在院所蔵）

兼載は神の申し子

当時の日本は豪族同士の勢力争いが絶えない時代で、会津もその例外ではありませんでした。兼載の父はそうした豪族の一人、猪苗代城主盛実であったと言われており、母は小平潟村主の石部丹後の娘・加和里と伝えられています。兼載の誕生については、次のような言い伝えがあります。

子どものできない加和里は、学問・農業の神様として知られる平安時代前中期の公卿菅原道真をお奉りする天満宮に、毎日お参りをしていました。百日目を迎えたある夜、どこからともなく現れた神様が一枝の梅の花を加和里に投げ与え、左のたもとに青梅が入ったなら男の子、右のたもとに入ったなら女の子と告げられました。

そしてある夜のこと、加和里は左のたもとに実が入った夢をみて、男の子を生みました。その子どもこそ後の猪苗代兼載だったので。兼載が菅原道真の申し子だといわれて言われているゆえんでもあります。

加和里は、道真が詠んだ

「東風吹かば匂いおこせよ梅の花」の和歌に由来する梅の精にあやかり、生まれたわが子に「梅」と名付けました。

三歳で和歌を詠む

天満宮のある小平潟では、古くから和歌を作ることが盛んに行なわれていました。兼載も幼いころから和歌に慣れ親しんでいたので、三歳で和歌を詠むことを覚えたといわれています。

小さいころから賢い子どもであった兼載は、修業を積むため六歳のとき会津若松の真言宗自在院に引き取られ、僧となり学問の道に進みました。自在院で修学する兼載は連歌を得意とし、近くの諏訪神社で行われた歌会では、他の者とは比べられないほどの能力を発揮し、歌会への出席を断られるほどでした。

連歌を詠むことに秀でていた兼載は周囲に妬まれ、歌会に参加できないよう部屋に閉じ込められたり、指を折られたりするなどの酷い仕打ちを受けました。兼載はそんな仕打ちにも耐えながら連歌で身を立てようと考え、十六歳のときに京都に行く決心をしました。

連歌師の最高位へ

その後、兼載は連歌の道を究めようと、中世の連歌師の最高峰と称された「心敬」や「宗祇」に師事。天皇や公卿、将軍や武将などに連歌を教えるまでになり、三十九歳の若さで連歌師の最高位、北野連歌会所奉行の職に就くまでになりました。兼載は多くの連歌会を催し、また自らも作品を作るとともに、連歌の編さんにもあたり、宗祇とともに「新撰菟玖波集」を完成させました。

兼載は故郷猪苗代を忘れることなく、幾度か猪苗代と会津の地を訪れますが、会津でも戦乱に次ぐ戦乱で、兼載が安住できる場所はありませんでした。兼載は会津や猪苗代でも多くの作品を残していますが、その一つが小平潟天満宮前の歌碑にある「さみだれに 松遠さかる すさきかな」です。

没後五百年の今年

小平潟には、兼載ゆかりの史跡が点在し、人知れず眠っています。兼載が永正三年（二五〇）六月六日に亡く

兼載と野口英世

もう一人の猪苗代の偉人。世界的な医学者として有名な野口英世は、猪苗代兼載の生まれ変わりだという説があります。

野口英世の父・野口佐代助が小平潟の小松山惣平の長男で、兼載とは血のつながりがあったらしいことや、母シカが小平潟に仕事に来ていた時に英世が生まれたという説もあることなどに由来しています。こうしたエピソードが兼載と小平潟、そして野口英世との結びつきを強くしているのです。

（文責 猪苗代の偉人を考える会 小松山六郎）



右 兼載像（会津若松市自在院所蔵）
左 江戸時代後期に小平潟近景を描いた十五図の内の一つ、猪苗代兼載の墓を描いたもの
「八重一重 散れと名のみは九重の 花のもとにも匂いぬるかな 地染」の和歌が添えられている
下左 幹の梅 小平潟天満宮が移される前の場所にある古木。
下中 小平潟にある兼載の母「加和里」の墓
下右 小平潟天満宮前にある兼載の歌碑
「さみだれに 松遠さかる すさきかな」

